慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東京大空襲の記憶の継承に関する社会学的研究
Sub Title	
Author	木村, 豊(Kimura, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.72 (2011.) ,p.148- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成22年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000072-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て農村社会の分裂が引き起こされているのは，日系工業団地に特有の問題であるともいえる。

ドゥニア村では日常生活の水面下において，廃材利権を巡り，村内権力にアクセスを持つ村官吏や外部ネットワークを持つマドゥラ人が，複雑に交錯する形で争っており，村内の貧富の格差を生み出す新たな構造が生まれている。

注

1) 実質成長率，人口はIMF “World Economic Outlook” (2010年10月)より。なお，インドネシアの総人口の半数以上は30歳未満の若年層である。
2) 民間消費支出を含めた国内総支出の内訳はBadan Pusat Statistik “Expenditure of Quarterly Gross Domestic Product at Constant Market Prices”より。個人消費は自己計算による。
3) Gabungan Industri Kendaraan Bermotor Indonesia (http://www.gaikindo.or.id/)
4) Asosiasi Industri Sepeda Motor Indonesia（http://www.aisi.or.id/）

参考文献

Anggaran Pendapatan Dan Belanja Desa. 2010*
Asosiasi Industri Sepeda Motor Indonesia.（http://www.aisi.or.id/）
Bank Indonesia. *Indonesian Finaicial Statistics*. 2010
Badan Pusat Statistik. *Expenditure of Quarterly Gross Domestic Product at Constant Market Prices*. 2010
Daftar Isian Potensi Desa Dan Kelurahan Desa. 2009*
Daftar Isian Tingkat Perkembangan Desa Dan Kelurahan Desa. 2010*
Data Perkembangan Penduduk Desa-2009–2010*
Gabungan Industri Kendaraan Bermotor Indonesia.（http://www.gaikindo.or.id/）
International Monetary Fund. World Economic Outlook. October, 2010
International Monetary Fund.IFS Online Services. 2010
Pemilihan Umum Bupati Dan Wakil Bupati Tahun Kabupaten 2010*

＊上記の参考文献一覧において，*印のついた文献は調査対象地の行政機関などによって発行されている。調査地の匿名性を確保するため，地名を含む発行所名の記述は省略している。

東京大空襲の記憶の継承に関する社会学的研究

木　村　　豊

1．問題の所在

戦後65年が過ぎ，戦争を経験した世代の高齢化とともに，戦争の記憶の風化といった問題が，いよいよ深刻化している。それは，現在，戦争を経験した世代によって戦争の記憶を表象することができる最終的な時期にあり，近い将来，そうした人びとによって戦争の記憶を表象することができなくなることへの危惧を意味している，と同時にそれは，戦争の記憶を表象する活動主体が戦争を経験していない世代へと移り変わろうとしていることへの危惧をも意味している。

つまり，戦争を経験した／経験していない世代という二つの世代間には大きな断絶が存在し，そうした断絶をめぐって戦争の記憶を継承することの問題が生起してきたといえる。それでは，戦争を経験し

た世代から，戦争を経験していない世代に，戦争の記憶を継承するとは，いかなることなのだろうか。そもそも，そのようなことは可能なのだろうか。

そうした問題意識を踏まえて，本研究では，東京大空襲の記憶の継承に関して，前年度は，戦争を経験した世代へのアプローチを試みたが，今年度は，戦争を経験していない世代へのアプローチを試みた。具体的には，東京大空襲の死者が一時的に埋葬されたが，現在はその痕跡をほとんど残していない，仮埋葬地の現地調査を行うとともに，戦争を経験していない世代で，そうした仮埋葬地の現在を撮影している写真家へのインタビュー調査を行い，そのような実践の中で，東京大空襲の死者が，いかに想起されているのかについて検討した。

2. 東京大空襲と仮埋葬地

仮埋葬地とは，戦時中，空襲の死体を一時的に埋葬した，にもかかわらず，現在，そうしたことを伝える痕跡をほとんど残していない場所である。

1944（昭和19）年11月より本格的に開始された米軍の空襲は，初めのうちは比較的その規模が小さかったために死者はほとんど出さなかったが，同年末から，空襲の規模の拡大に伴い，火災によって大量の死者を出すようになり，特に1945（昭和20）年3月10日の大空襲では，一夜にして約10万人という大量の死者を出した。そうして発生した大量の死体は，都内各地から動員された警防団員などによって，都内の各公園などに集められ，氏名住所等の判明するものとまったく不明のものとに区別して数日間近親の捜索に応じた後，仮埋葬された。

仮埋葬された死体は，その後数年間，仮埋葬地において放置されたが，終戦後1948（昭和23）年度から3年間の間に東京都によって改葬事業が行われた。掘り上げられた死体は，都内の火葬場に持ち込まれ，火葬した後，遺骨は，氏名が判明しているものについては引き渡しを行ったが，引き取りに来ない遺骨も多数あり，それ以上に氏名が判明しない遺骨が大量にあったため，氏名が判明していて引き取り手のないものと，氏名の判明しないものとに分け，関東大震災で亡くなった身元不明の遺骨が納められていた墨田区横網町公園内の「震災祈念堂」に納められた。またそれに伴い，「震災祈念堂」は，「東京都慰霊堂」へと改称された。

そうして，1951（昭和26）年からは，毎年3月10日に，「東京都慰霊堂」において，東京都慰霊協会によって慰霊法要が行われており，現在も，法要の日には多くの遺族がそこを訪れる。しかし，1945（昭和20）年4月には，東京都が47箇所の仮埋葬地に墓標を立て，東京仏教連合会が巡回法要を行ったとされているが，現在，仮埋葬地であった場所では，そうした公的な慰霊法要は行われておらず，またそこには仮埋葬地であったことを示すものも存在しない。

筆者は，2007年から2010年にかけて，東京大空襲の中心的な被災地である墨田区・江東区・江戸川区・台東区における仮埋葬地50ヶ所，及び，同地域において地域住民などによって建立された東京大空襲の死者を供養するためのモニュメント（慰霊碑・追悼碑・地蔵尊など）66ヶ所での現地調査を行うとともに，近隣住民・関係者への聞き取り調査を行った。

その調査結果を簡単に概観すると次の通りである。まず，当時仮埋葬地であった場所に，現在，そのことが明記されている場所はない。また，仮埋葬地の近隣住民の中には，仮埋葬があったことについて知る者が少なからず存在するものの，普段そのようなことが語られることはない。また，モニュメントの中には仮埋葬地との関係を有するものもいくつか存在するものの，そうしたモニュメントにおいて

も，碑文などに仮埋葬に関することは記されていない。

そうした状況は，戦争の物理的痕跡の一掃や，空間的な封じ込めを通した，「記憶の再定義」［米山 2005: 105］が行われた結果であると考えられる。ノラは，「人間の意志，もしくは時間の作用によって，なんらかの社会的共同体のメモリアルな遺産を象徴する要素となったもの」を「記憶の場」と定義しているが［Nora 1984=2002: 18–19］，したがって，東京都慰霊堂やモニュメントにおいて，東京大空襲死者の「記憶の場」が作られていった一方で，仮埋葬地は，東京大空襲死者の「記憶の場」としての役割を失っていったと考えられるだろう。

3. 仮埋葬地写真という実践

これまで，東京大空襲の死者の記憶を表象する活動としては，遺族などの戦争を経験した世代によって担われてきたが，近年，戦争を経験していない世代によって，東京大空襲の死者の記憶を表象する活動が行われている。筆者は，2007年から2010年にかけて，そうした活動者へのインタビュー調査を行っているが，ここでは，その一つである，何の痕跡も残されていない現在の仮埋葬地を撮影している写真家の活動を取り上げたい。

仮埋葬地の現在が写された写真展「Requiem 東京大空襲」は，一般的な戦争の展示に見られるような，戦争に至るまでの歴史的な経緯などに関する展示を見ることはできない。そこには，一見すると「ふつう」の公園の日常的な風景が写された写真が並んでいる。ここでは，ごく簡単にではあるが，そうした現在の仮埋葬地写真を撮るという実践を通して，空襲の死者が，いかに想起されているのか，この写真展の作者へのインタビュー記録をもとに，検討したい。

仮埋葬地写真を撮るという実践は，仮埋葬地をめぐる二つの「衝撃」が基礎になっている。それは，自分が〈いま〉立っている〈ここ〉が，大量の死体が埋葬された場所＝仮埋葬地であることへの「衝撃」と，〈ここ〉には〈いま〉，そうした仮埋葬の痕跡は存在せず，「日常の風景」が広がっていることへの「衝撃」，との二つである。仮埋葬地写真は，そうした二つの「衝撃」をもって，都内各所の仮埋葬地を訪ね歩き，「痕跡」が存在しない仮埋葬地の写真を撮影したものであり，そのため，写真展「Requiem 東京大空襲」は，そうした仮埋葬地をめぐる二つの「衝撃」とそのあいだの落差を表現する「しくみ」を有している。

ひとつの「しくみ」は，〈ここ〉の〈いま〉を撮る，ということである。仮埋葬地に関する資料はいくつか存在するものの，その資料には「〇〇公園」などと書かれているだけで，その公園のどこに埋葬されたのかは書かれていない。そこで，仮埋葬地写真は，近隣住民・関係者などへ聞き取りをもとに明らかにした，死体が埋葬された詳細な場所＝〈ここ〉の〈いま〉が撮影されている。そうすることで，この写真展は，仮埋葬地の〈ここ〉の〈いま〉が表されているといえる。

もうひとつの「しくみ」は，そうして撮られた仮埋葬地写真の下に付けられた「キャプション」である。仮埋葬地の〈ここ〉の〈いま〉が表されている写真に，それがかつて仮埋葬地であったことを表すものを見つけることはできない。そこで，「キャプション」には，その仮埋葬地に埋葬された死体の数が記されている。そうすることで，この写真展は，写真に写されている「ふつう」の公園に，仮埋葬地が「かつてあった」ことが表されている。

そうした二つの「しくみ」が表すものは，仮埋葬地が「かつてここにあった」ということである。セルトー［1987］は，そうした「ここにあった」という「ことば」が表すものは，「生きられた場所が不

在の現前のごときものだという事実」であるといい，次のように記している。

「いますがたを見せているものは，もはやないものを指ししめす。「ごらんなさい，ここにあったんですよ…」そう言いながら，もはやそれは見えないのだ。…事実，場所というのは，幾重にも重なった断片からなっており，その層のどこかに移っていったり，またそのどこかから出てきたりするし，そしてまた，こうして動きゆく厚みそのものを活用している。こうしたことこそ，場所というものの定義そのものにほかならない」[Certeau 1980=1987: 229]。

したがって，仮埋葬地写真という実践は，そうした場所の重層性の中で，東京大空襲の死者を想起するものであるといえるだろう。

4. おわりに

戦後65年が過ぎた現在でも，毎年3月10日近くになると，家の墓で，地域のモニュメントで，横網町公園で，東京大空襲死者と向き合う遺族らがいる。そこには，遺族が，空襲で亡くなった家族を想起するための，東京大空襲死者の「記憶の場」の多重的な構造を見ることができる。

しかし，そうした場における，戦争を経験した世代による空襲死者を想起する実践は，死者と生者との個別的な関係によって支えられており，そのため，そうした場では，死者との個別的な関係を持たない戦争を経験していない世代の人びとを見ることはできない。それに対して，仮埋葬地という場は，死者と生者との個別的な関係を支えるものとならないがゆえに，東京大空襲の死者を想起する「記憶の場」とはならなかった。そうしたことを仮埋葬地写真は表している。

そして，そうした場所の重層性にこそ注目する仮埋葬地写真という実践は，戦争を経験していない世代が，戦争の記憶を表象する，一つの可能性を示唆しているといえるだろう。したがって，次年度は，そうした実践が，広く戦争の記憶の継承という問題に対していかなる意味を有しているのか，他の戦争の記憶との比較から検討することを進める予定である。

付記

本稿で示した内容は，学会報告「空襲の犠牲者・死者が想起される場所―「仮埋葬地」という写真実践を通して」（関東社会学会第58回大会自由報告，中央大学，6月・2010年）で報告した内容の要約である。

【主要参考文献】

荒井信一　2008 『空爆の歴史－終わらない大量虐殺』岩波書店.
Michel de Certeau 1980 L'Invention du Quotidien. Paris: UGE.『日常的実践のポイエティーク』国文社1987.
Pierre Nora 1984 Entre Memoire et Histoire, Les Lieux de memoire, Editions Gallimard. 谷川稔（訳）『記憶の場―フランス国民意識の文化＝社会史（対立）1』岩波書店2002.
東京都　1955 『東京都戦災誌』東京都.
東京都慰霊協会　1985 『戦災殉死者改葬事業始末記』東京都慰霊協会.
米山リサ　2005 『広島―記憶のポリティクス』岩波書店.